
セピア色の記憶

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セピア色の記憶

【Nコード】

N5164P

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

芝井探偵第7弾。日頃マスターに受けている恩を返そうと、生き別れになっている一人娘を探すために奔走する。

ブローグ

寒風が頬に刺さるようで痛い。芝井は肩をすばませながら、この前のクリスマスのお礼（拙著『黒い服を着たサンタクロース』参照）を言うために喫茶“ふみ”に向かっていた。ふみに着き中へ入ると、暖気とともにマスターが人の良い笑顔でいつものように迎えてくれる。俺もいつものようにコーヒーを注文したが、普段座っているテーブル席ではなく今日はマスターを視界に入れることが出来るカウンター席に腰を下ろした。マスターは一瞬驚いたような表情を作ったが、それを悟られまいと思ったか、クルリと反転しコーヒーカップを棚から出そうとしている。

「この前は有難うございました。マスターが工夫して作ってくれたサンタクロースのおかげで成功した、と言っても過言ではありません。子供たちの驚く顔が見れて本当に良かった。」

作業の妨げにならないよう静かな口調で話しかけた。マスターは俺がカウンターに座った意味を察したようで「ああ」と言って何度も首を振った。

「いいいえ、ただ言われた通りにしただけですから。けれど成功して良かったですね、やはりああいう行事では子供が喜ぶ姿を見るのが一番ですから。」

「そうですね。ちなみにマスターはお子さんはおられないんですか？もし何かするって言うのなら今度は私に手伝わせて下さいよ。」

腕まくりするような仕草を見せてやる気をアピールしたが、マスターは少し陰のある微笑を返しただけで黙ってしまった。

「すみません。プライベートな事をずけずけと聞いてしまつて。」
そういえばマスターの家族構成を詳しく聞いたことは今まで無かった。これだけ通い詰めてもマスターの奥さんや子供らしき人を見ることが無いということは未だに未婚か離婚したかのどちらかだろう。どちらにしても愉快的話ではない、マスターに申し訳ないこと

をしてしまった。

「いえ、いいんです。少し娘の事を思い出しまして。今年で20になるんだったかな。まあ離婚してから一度も会っていませんし、娘も父親の顔を覚える間もなかったのであちらは気にしてないのかもしれないが。」

注文したコーヒーを俺の前に差し出しながらマスターが自虐的な笑みを浮かべた。

「そうだったんですか。娘さんの写真はありますか？見てみないな、マスターの顔から推測してもなかなかの美人そうな感じがするなあ。」

これはお世辞ではない。マスターは髭を生やしてはいるが、優しい目をしていて人好きのする顔立ちなのだ。

「あるにはありますが、なんだか恥ずかしいですね。」

写真を出すのをためらうマスターを強引に説得し、娘さんの写真を見せてもらった。

「部屋の窓際に飾ってあるので、色が飛んでしまってるんですよ。」

少し照れながら出してきた写真を見ると、確かに劣化が激しかった、まるでセピア色のように変色している。が、それにも増して目を引いたのが被写体であるマスターの娘さん自身だ。これは赤ちゃんの頃の写真だ。そうか、『娘が父親の顔を覚える間が無かった』というのは、娘がまだ赤ちゃんのときに離婚したということか。その時から一度も会っていない。そして『あちらは気にしていないのかも』かもしれない』と言う事は、逆に言うところ『こちらは気にしている』と言う事を意味している。やはり会いたいんだな、父親としては当然の想いだろう、愛娘なのだから。

「思ったとおり可愛い女の子ですね、目元なんてマスターそっくりだ。」

素直に感想を言うと、マスターは「そうですか？」と言って嬉しそうに笑った。

コーヒーのお代わりを頼みマスターが用意している間に食い入る

ように写真を眺めた、それこそ隅々まで頭に叩き込むように。

俺の腹は娘さんの話が出たときに決まっていた。マスターには世話になりっ放しだ。娘さんを探し出し、会わせることで日頃の恩返しをしよう。クリスマスに姉と直美に笑顔を与えてくれたマスターに、今度はこちらが笑顔を届ける番だ。

芝井は高ぶる感情を抑えるかのように目を閉じ、強風でカタカタと音を立てる窓の音に耳を傾けていた。

情報収集

「お待ちどうさまでした。」

マスターが2杯目のコーヒーを俺の前に差し出す。

「写真のことでもう少し質問しても良いですか？」

「はあ、別に構いませんが。」

なぜそんなに娘の写真に拘るのだろうか、とマスターは不思議そうな顔をしているが俺としては最低限の情報は掴んでおかないと『マスターと娘さんを会わせる』という目的を達せられない。あくまでマスターに勘繰られないよう慎重に質問していかなければならない。

「娘さんはなんというお名前なんですか？」

「美雪です、離婚して母の姓になりましたので白石美雪ですね。まあ、その後母親が再婚などしていればまた姓が変わるでしょうから現在のことはわかりませんが。」

「離婚直後は、近くに引越されたんでしょうか？」

「ええ、確か 芝井さんの事務所からも近かったと思いますよ。リバーサイドハイツつていう所でした。」

そこなら知っている。今は新しく改装されているが、同名で存在している。

「マスターはこの出身なんですか？」

あまり離婚の話が続けるとマスターに怪しまれてしまう。今度はマスター自身の話題から探りを入れてみよう。

「ええ、ずっとこの地域で暮らしています。実家もすぐそこなんですよ、親父は昔小さな食堂を営んでいました。もうだいぶ前に引退しましたが。」

「そうだったんですか、どつりでこの辺りに詳しいわけだ。じゃあ、奥さんもこの辺りのご出身ですか？」

「いえ、妻の実家はB県のC市です。出会った頃の妻は大学生で、

実家を離れてこちらで一人暮らしをしていたようです。よく親父の食堂を利用してくれてたんで、自然と仲良くなっていって。」

「へえ、C市と言えば桜が有名な所ですよね？」

「よくご存知ですね。樹齢何百年かの大木が一本だけ佇立している姿は荘厳でいて美しく、見ごたえがありますよ。妻の実家もその近所です、帰ったときは必ず見に行っていました。」

「羨ましいですね、そんな景色を見ながら暮らせるなんて。」

と言った時、背後からカランカランというドアに取り付けてある鈴の音が聞こえた。マスターが「いらっしやいませ」と言って応対に出た。

もう少し情報が欲しかったが、客が来てしまったので出直すしかなさそうだ。いや、むしろ既出の情報で答えに辿り着けるよう行動するのが優先だろう。愉快ではない話題を蒸し返すことは予想以上に相手に猜疑心を持たれる、というのは経験上知っている。後は事務所に戻って情報を整理するか。

マスターが厨房に入って料理を作っている間、ゆっくりコーヒーを飲んで時間を潰した。ひと段落したところを見計らって清算を願う出る。

「つまらない話をしてしまつて済みませんでした。」

マスターは申し訳なさそうに頭を下げた。

「とんでもありません。貴重なお話しが聞けてマスターとの距離が一段と近くなつたような気がします。機会があればC市の桜の木、見に行つてきます。」

微笑みながら話すと、マスターもいつもの笑顔で見送ってくれた。

外は相変わらずの冷え込みだった。しかし、ふみに来る前と来た後とは感じ方が全然違う。何が違うかはマスターとの会話にあることは明白だ。目的を持つことは素晴らしい、こんなに心の中を熱

くさせてくれる。

芝井は来るときとは対照的に胸を張り、まるで寒風に抗うような力強い足取りで歩いて行った。

搜索1

次の日の朝から搜索を開始した。

時系列に沿っていった方が一番手っ取り早いので離婚後引越したというリバーサイドハイツをスタートとしよう。今もここに住んでいてくれれば早くも捜査終了なのだが、昨日のマスターの雰囲気では転居している可能性が極めて高い。まあ、どちらにせよ動き出さないことには始まらない。いつものスーツに身を包み、最初の目的地へと向かった。

リバーサイドハイツ、川沿いといっても小さな川が流れているだけで名前が醸し出す雰囲気とは随分と異なっている。数年前に改築したので外観は新しいが貧乏臭さというか、古風な匂いは払拭できずにいた。

まず、表札を確認してみる。マスターとの話しでは部屋番号まで聞き出せなかったのですべての部屋を調べるしかない。2階建ての建物なのですぐに確認することが出来たが、やはり白石という姓はなかった。厳密に言うとなら表札を掲げていない部屋もあったのでそこに住んでいるということも有り得るが。

「あんだ、この家に興味あるのかい？」

ハイツと向かい合って思案に暮れている俺を見て誰かが話しかけてきた。ハツと振り向くと腰をかがめた高齢の女性と目が合った。

「え」

返事に窮していると、構わず話し続けてくる。

「私はこの建物の大家なんだよ。もう一度聞くがこの家に興味があるのかい？部屋は余っているから、直ぐに入ることができるんじやが。」

これはラッキーだ、もしかしたらハイツ入出の履歴が残っているかもしれない。

「いえ、申し訳ございませんが部屋ではなく人に興味があるんです。以前こちらに白石さんという方が住んでいたと思うのですが。」

「白石、白石ねえ、」

大家は首を捻って考え込んでいる。直ぐに思い出せないということとは、白石さんはすでにここに住んでいないということだ。従って表札が掲げられていない家にも白石さんは住んではないということになる。

「転居される際の履歴なんかは残ってないんですか？」

「あるにはあるが、あんた何でその人のことを知りたがるんじゃない？」

今度は打って変わって怪しい人物を見るかのような目をしている。「今年は大学創立50周年を迎えまして、創立祭なるものを企画しているんです。その参加者名簿を作成するために卒業者の住所を当たっているのですが、白石さんはこのハイツの住所になっていたんです。けれども引越したみたいなんで、転居先を教えて頂けると有難いんですが。」

咄嗟によくこんな事言えるな、と自分でも感心するが警察でもない俺が情報を手に入れるためには多少危険な道も選ばざるを得ないのだ。

「そうじゃったんか。じゃあ家に来なさい、見せてあげよう。」

一応信用してくれたみたいで、ゆっくりと歩き出した。その後ろをついて行って大家の家の玄関で待っていると、乱雑に詰め込まれた大きなファイルを持ってきた。

「これが今までの履歴じゃ、その人の事もあるといいんだがね。」

「有難うございます。後は一人で探しますんでどうぞお構いなく。」
と言って、早速ペラペラとページをめくり始めた。

白石、白石、あった！白石恵、家族構成も娘の名前も一致しているので間違いないだろう。マスターの奥さんは恵さんという名前

なんだな。また一つ聞きそびれていた情報を手にすることができた。転居先は、隣町の『KKハイム』か。転居年は、今から18年前！ということは、ここには1年弱しか居なかったってことか。ここから先はマスターも居場所が判らないので、娘にも会うことができなかったってわけか。当然俺が知らない様々な理由があるにせよ、なんだか寂しいことだな。

「どうかな、あったかの？」

急に話しかけられたのでドキツとしながら顔を上げると、大家さんがお茶を持ってきてくれた。普段からとても親切な人なのだろう、こんな人に嘘を付いて情報をもぎ取った自分が情けなく思えてくるが、仕方ないと思うしかない。心の中で謝っておこう。

「ありました。かなり詳しく記載されていたので大変助かりました。どうも有難うございました。」

ファイルを閉じて大家さんに渡す。その後お茶を飲みながら少し雑談した後大家宅を離れた。

腕時計を見た。昼過ぎか、もう一軒行けるな。よしっ！と気合を入れて歩き出す。

冬といえども真昼はいくぶんか厳しい寒さも和らぐみたいだ。行き交う人がせかせかとせわしく歩いているのとは対照的に、ゆっくりとした歩調でKKハイムへ向かった。

搜索2

KKハイムへはバスを利用する。車という手段も考えたが、近場であるし聞き込みは小回りが利かないといけない。

バスに乗り込むと、ここだけ夏か！と叫びたいくらい暑苦しい車内に耐え、朦朧とする意識の中で一秒でも早く目的地に着くことだけをひたすら祈り続けていた。バスを降りると心の底から安堵のため息が出る。真冬の冷風がこんなに心地よく感じるとは。

KKハイムはバス停からさほど遠くなかった。前と同じように表札の確認から始めるが、やはり白石という名前を見つけることは出来なかった。ここにも表札を掲げていない部屋が一軒あった、それが白石さんである可能性も残されているが。

次に自転車置き場を確認する。自転車のネームプレートで判断できるかもしれないと思ったからだ。自転車の前輪部分を目視してみると、先程確認した住人と異なる姓のネームプレートを発見した、おそらく表札を掲げていない家人の所有物だろう。これで、ここにも白石さんは住んでいないということが確認された。

早くも行き詰ってしまった。この前のように大家さんが出てきて助けてくれる、なんて事もあるはずは無い。捜査の糸が切れてしまった、次はどこから手繰り寄せればいいんだ。

腕組みして考え込んでいるとお腹がク〜と鳴った。そういえば昼飯を食べてなかった、この辺りで休憩がてら食事でもするか。あてもなくブラブラと彷徨っていると、どこからかコーヒーの香りが鼻腔をかすめた。その香りをたどって歩いていくと、小さな喫茶店が見えた。よし、あそこで昼食にするか。

入り口のドアを開けようと手を伸ばした瞬間、バチツと頭の中がスパークする感覚を覚えた。喫茶店、そうだ、マスター家族は少なくとも結婚してから子供が生まれて少しの間は喫茶店で暮らしていたんだ。それならば、近所に白石さんと仲が良かった人がいたかも

しれない。

そう思うと俄然やる気が湧き起こり、踵を返して駅のある方へと歩き出した。もう冬のバスはごめんだ。

再出発

結局振り出しのマスターの喫茶店付近に戻ってきた。最初から近所の搜索から始めれば良かったのだが、目の前にある安易な情報に飛びついて時間を浪費してしまった。自分の推理力の未熟さを悔いるが、過去を変えることは出来ない。人生は日々勉強だ、変えられない過去を悔いるよりは変えることができる未来に全力を尽くすべきだろう。

さて、どこで聞き込もうか。マスターに見られると困るので少し離れた場所にするか。

ゆっくり歩きながら聞き込みする店を吟味する。白石さんは女性なのだから当然同性の方が知っている確率が高いだろうし、年齢もそれに近い人を選ぶとさらに可能性は増すのかもしれない。そう考えながら一軒の雑貨屋に足を踏み入れた。

店内を見回す振りをして、先程の考えに近い人を探す。と、そこに品物の陳列作業をしている女性を発見した。この女性はなかなか相応しい人かもしれない。

「すみません。」

「はい、いらつしやいませ。どうされましたか。」

尋ねられた女性はハキハキとした感じで応対してきた。

「ちよつとこの辺の地理に疎いもんで教えて欲しいのですが、コーヒーのおいしい店を知りませんか？」

「ああ、それなら“ふみ”という喫茶店が良いかもしれません。私もたまに利用しますがとても香りの高いコーヒーを出してくれますから。ここを真直ぐ行つて右手にありますよ。」

女性は笑顔で答える。よし、まずは怪しまれずに話しの流れを作ることはできた。ここからが勝負だ。

「大きい店なんですか？」

「大きくはありません。よく見かける一般的な喫茶店っていう感じ

です。」

「へえ、小さい店なんですか。それなら夫婦で経営されているんでしょうね。私も将来は喫茶店を、と思っっているのですが夫婦で仲良く経営できたら最高ですよ。」

明るい口調で話すと、女性の方は俯き加減で小声で答える。

「いえ、男性の方お一人で経営されています。」

「えっ、そうなんですか！それは大変だな。」

いかにも驚いた、という顔を作る。

「以前は夫婦一緒になさっていたんですが離婚されて、奥さんと娘さんは出て行きました。」

「そうだったんですか、旦那さんも寂しく思っていることでしょうね。」

「そうですね。娘さんが可愛くてしょうがない、といった感じでしたから。」

「ときどき喫茶店に遊びに来るということはなかったんですか？」

「いえ、無かったみたいです。それに、しばらくしてその奥さんは重い病気を患って子供と一緒に実家へ帰ってしまったようですし。」

「病気！？」

今度は本気で驚いた。声が大きすぎたのか、女性がビクツと肩を上げた。

「ああ、失礼しました。そうですね、病気で実家へ。それは何年前の話ですか？」

「ずいぶん前ですよ。確か、14、5年前じゃないかしら。」

女性は手を顎に当てて考え込んでいる。これ以上詮索して怪しまれると困るので、ここらで切り上げるか。

「そうですね。いや、お仕事中いろいろ教えて下さって有難うございました。早速その喫茶店に行ってみたいと思います。」

笑顔で話しかけると、女性もお辞儀をして作業に戻って行った。店を出て、歩きながら情報を整理する。白石さんの足取りが太分

把握できたな。まず離婚した直後、近くの『リバーサイドハイツ』で一年弱暮らし、そこから隣の『KKハイム』に引っ越す。この後の足取りは掴めなかったが、今から約15年前に実家へ帰っている。つまり、この捜査の答えはB県C市にある、ということだ。

ふう、とため息を吐く。明日はB県か、それにしてもマスターの奥さんが病気だったとは。昨日のマスターの口ぶりから推測すると、知らない可能性の方が高い。報告すべきか否か。

いや、迷う必要なんてない。娘さんと会わせる、と決めた時からある程度のことは覚悟していたはずだ。それに娘さんの近況を知るということは同時にその母親である白石恵さんの近況を知る、ということにも直結している。避けて通ることは許されない。

『真実を知る』ということは良い事ばかりではない。むしろ知らない方が良かったと思う方が多いのかもしれない。それはマスターも判っているはずだ、そう信じるしかない。すでに賽は投げられているのだ、結果がどうであれ自分を、自分の考えを信じて歩むしかない。

芝井は明日に備えるため帰路に着いた。相変わらずの寒さだったが空を見上げると小さな星が散りばめられて宝石箱のような、そんな夜だった。

彷徨い歩く

B県C市は新幹線で2、3時間乗り、そこからローカル線に乗り換えさらに1時間ほど揺られた所にあった。山あいの自然豊かな風景が普段暮らしている町の喧騒を忘れさせてくれるようだ。寒さは厳しいが、それをも許容してしまう景色がここにはあった。まあ、ここで生活していないから言えることなのかもしれないが。

C市に来たはいいけど、ここからどうやって白石さんの住所を割り出すか。

駅を出て少し歩いたところに食堂があった。昼飯もまだだしついでに情報収集も出来るかもしれない、と思い立ち暖簾をくぐることにした。

牛丼をかき込んでいる傍らで、さつき食堂内の本棚で見つけた電話帳に目を移す。同市内で『白石』という姓がどれほどの数あるか確認するためだ。やはり相当な人数に及ぶ、ローラー作戦では燃費が悪すぎる。

どうすべきか。目を瞑りながら今までのことを思い返していると、記憶の断片に引つ掛かる感覚を覚えた。そうだ、確かマスターは『妻の実家は桜の名所のすぐ近所』だと言っていた。

「すみません。」

他の客に食べ物を運んでいた店員を呼び止める。

「この町に桜の木が有名な場所がありますよね。ここから近いんですか？」

「ええ、この道を車で真直ぐ行ったら看板が見えますんで後はそれに沿って行って頂ければ1時間もあれば着くと思いますが。えっ、町名？あそこはD町になりますよ。」

店員は地元の人だったのか、こちらの質問にスラスラと答えてくれた。有難う、とお礼を言ったあと再び電話帳を確認する。6件か、まあこの程度の数なら今日一日でこなすことが出来るだろう。

よし、そうと決まれば早速捜査開始だ。該当する白石姓の住所をメモし食堂を後にした。

捜査は思った以上に難航した。地理的に疎いのは当然のこと、住所を示す標識も無く、表札を確認したくても庭を通らないと玄関には辿り着けない田舎にありがちな家が多く、目視で確認することは困難だ。かといってずかずかと庭に侵入して確認するわけにもいかない。さらに人に尋ねたくても人が見当たらない、といった惨憺たる状況だ。

かろうじて3件は見つけることができたが、これといった決め手に欠ける家ばかりだった。それも数少ない情報から推測してのもので、信憑性という点で大いに疑問が残る。

空の色がだんだんと朱に染まっていく。このような場所では宿を探すにも苦労するだろう、何とか今日中に終わらせたいが。

トボトボと道を歩いていると、遠くから自動車がこちらの道に向かってるのが見えた。両手を振って止まって欲しいとのアピールをすると、数十メートル通り過ぎた辺りで車が停車したので急いで駆け寄る。

「どうもすみません。少しお教え頂きたいのですが。」
ウィンドウが開けられると同時に息を切らせながら話しかける。

運転席にいる女性は声が聞こえる程度にウィンドウを4分の1ほど開けた後、不信任を持った目をこちらに投げかけている。それは当然だ、地元の人間でないことは一目瞭然だし、大人の男が何かをアピールするように大手を振っていたら無視して走り去っていくのが普通だ。まずは不信任を取り除くことから始めなければ。

「すみません。道に迷ってしまったんで教えて欲しいのですが、白石恵さんという方の家はご存じ ないですか？」

話しかけている際にふと女性の顔を見てハッとしてしまった。こ

の子は。

「知ってはいますけど、何の御用で行かれるのですか？」

若い女性は冷たい視線を投げかけてくる。

「今年大学50周年ということで創立祭を企画していて、その参加者名簿を作成しているのですが、以前住んでいた近所の方から恵さんが実家に帰られていると聞きましてお伺いしたいと思っています。」

できるだけ丁寧に、不信感を与えないように話す。女性は俺の顔をじっと見つめていたが、

「わかりました、お乗り下さい。ただし少しでも不審な行動をされたらすぐに警察へ連絡しますから、それで良いのならどうぞ。」

と言ってドアのロックを解除してくれた。後部座席に乗り込むと無言のまま走り出した。

対面

「着きました。」

ルームミラー越しから合図をして、降車を促してきた。車を降りて目の前を見ると、年代を感じさせる木造の大きな家が建っていた。大きくはあるが、よく見ると所々傷んだ分部が修繕されずに放置されていて、庭の手入れも行き届いているとは言い難い。

「中へどうぞ。」

車を駐車してきた女性が中の部屋まで案内してくれた。お茶を出してくれ、そのまま机を挟んで向かいに座った女性は落ち着いた表情で凜としていた。

「白石恵さんは？」

差し出されたお茶を飲み、一息ついたところで話し始めた。

「母は、随分前に亡くなりました。」

視線をずらすことなく、はっきりとした口調で返事をする。やはり最初に見たときの直感は当たっていた。この女性は白石恵さんのことを母と言った、すなわちこの人物こそがマスターの娘、白石美雪さんなのだ。

マスターに見せてもらった写真と現在の美雪さんの顔が俺の頭の中で重なり合い、色あせてセピア色になっていた写真が徐々に色彩を帯びてくる。この目元、やはりそっくりだ。

「今、『母』と仰いましたか？」

聞き間違いがないか確認してみる。すると、美雪はうつすらと笑みを浮かべながら答える。

「お分かりになっていたんでしょう？私が白石恵の娘だということを。そして大学の創立祭なんてことはあなたの作り話で、母でなく私に用があるのでしょう？」

なぜ判ったんだ？じつとりと手に汗がにじんでくる。

美雪はまるで俺の反応を楽しんでいるかのように今度はニッコリと

笑った。その笑顔は無邪気な少女のようだ。

「うふふ、驚きのようですね。タネ明かしをしましょうか？あなたは私の顔を見て、すごく驚いたような顔をしていました。なぜでしょうか？それは私の顔を見たことがあるか、『私の顔に見覚えがある』かのどちらかでしょう。右も左も知らない片田舎で彷徨っていたところに急に見たような顔に出くわしたら、あなたでなくてもあんな顔になるでしょう。そして次に大学の創立祭なんて嘘を付いたこと。たかだか参加者名簿を作るためにこんなに片田舎まで遠征してくる人なんていないでしょう？まして母が大学を卒業してから20年以上経っているわけですよ。そんな効率の悪い方法で全ての卒業生の参加者名簿を作成するわけじゃないじゃないですか。じゃあ、なぜあなたは嘘を付いたのでしょうか？あなたは何らかの理由で私のことを白石恵の娘だと考えた。この機を逃してはならない、しかし直接尋ねても無駄に警戒されるだけで期待する効果を得ることは難しい。ならば私が知らないような話題から入らなければいけないと判断して瞬時に作り話を創作した。仮に母に会うことが真の目的なら、もっと現実味のある話を事前に用意してもう少しまともな嘘がつけたはずですからね。これらのことからあなたは私に会うことを目的にしている、と判断したわけです。どうですか？当たらずも遠からず、ってところじゃないですか？」

啞然として聞き入ってしまった。愛らしい顔に油断したわけではないが、聡明な女性のように驚いた。

「いえ、ほぼ正解です。素晴らしい洞察力に聞き惚れてしまいました。嘘をついてしまったことは謝罪します。」

素直に負けを認め、頭を下げる。

「しかし疑問も残ります。あなたはそのことを判っているが、なぜ私を車に乗せ家に招き入れてくれたのですか？」

当然の疑問点だ。しかしこの問いの答えは用意していなかったのか、一転して困ったような表情をしている。

「うん。なぜ、と言われても明快な答えは持ち合わせていません。」

ただ、あなたの目を見て判断しただけです。この人は『良い人そうにも見えないけど、決して悪い人じゃないだろう』と。もちろん私は人相学に精通しているわけじゃないので絶対の自信をもっているわけじゃありません。だから、あなたが乗車する際に警察の話題をして釘をさし、さらに急に不審な行動を取られたら危ないので携帯はワンプッシュで警察に繋がるようにセットし、防犯ブザーもすぐ傍に置いて防御態勢を整えていたつもりです。今でもあなたのことを全面的に信用しているわけじゃないですよ。」

ほら、と言って自分の携帯電話のディスプレイを見せてきた。そこには「110」がいつでも発信できるようにセットされている。

俺はそれを見た途端、声を上げて笑った。この子はマスターの娘であるということ抜きにしても面白く、魅力のある女性だ。

「いやあ、その判断に間違いはありません。確かに私は『良い人』ではありませんから。」

と返事をする、美雪は再び無邪気な笑顔に戻った。

「けれど『悪い人』でもない、でしょ？人を疑い始めたらキリがないですから。私は人を信じるころから始めたいんです。その人の目を見て会話して、自分なりに咀嚼して自分で判断したいんです。最初から先入観を持って接していたら、私自身の成長も止まってしまいますからね。」

穏やかな表情で淡々と語る。ただただ感心するばかりだ、この子は聡明なだけでなく良識も備えている。

「あともう一つは、私はあなたのことを知らないのに、なぜあなたが私のことを知っているのかということに興味があることぐらいでしょうか。」

今度はいたずらっ子のような笑顔をしている、まるで今の状況を楽しんでいるかのようだ。

「まあ、それは晩御飯を食べてからにしましょうよ。祖父母にも作ってあげないといけないので。」

そう言って立ち上がった美雪を見て、

「い、いえ。勝手に押しかけた上晩御飯までご馳走になるわけには
」

制止しようとしたが、

「まあいいじゃないですか。それに、このままあなたに帰られた
のではモヤモヤした気持ちが残って私が困りますから。3人分も4
人分も手間は変わりませんので、少しそのままお待ち下さいます
か。」

と言いつつ部屋を出て行った。

完全にあの子のペースだな、苦笑するしかない。話しに気を取ら
れて気付かなかったが、外はすでに真っ暗になっていた。風が吹く
と聞こえてくる木々のざわめきに耳を傾けながら待ち人が夕食を運
んで来てくれるのを待つことにした。

収獲

白米、鯖の味噌煮、ほうれん草のおひたしに味噌汁と次々に食台に並べられる。独り暮らしが長い俺にとっては久しぶりの家庭的な料理だ。味の方も申し分なく、存分に楽しむことができた。

「味はどうですか？」

食事をしながら美雪が尋ねてきた。祖父母は足腰が悪く自室で済ませていたみたいで、差し向かって食事をしていた。

「感涙しそうなほど美味しいです。才色兼備な上に料理も上手とは、恐れ入るばかりです。」

「あはは、お世辞が下手ですね。そういえばまだお名前を伺っていませんね。私の名前はご存知のようですからいいですよね。」

「芝井有也と申します。」

「芝井さん。うーん、やはり聞き覚えはないですね。」

美雪は箸を下唇に押し付けながら考え込んでいる。食事中だがそろそろ本題に入るべきだろう。

「知らないのは当然のことです、私は探偵ですから。しかし今回のことは誰からか依頼を受けて、ということではなく自主的に動いています。なぜ探偵が、しかも自主的に、とお思になるでしょう。私はある人物に大恩を受けました、というか今も受け続けているといつてもいいかもしれません。その恩を少しでも返したいという一心で今回の調査を始めました。聡明なあなたは、その人物が誰かということはもうお判りかもしれませんが。」

「父、ですか？」

美雪の目が憂いを帯びてくる。

「そうです、私はマスターと呼んでいます。つい最近マスターとの会話の中であなたの存在を知りました。そして、これは直接聞いたわけではないですけど、マスターが娘であるあなたのことを常に気にかけていることも感じました。そこで、なんとかマスターに会っ

て頂けないかとお願いに参ったのです。」

反応を見るため一度話を切った。美雪は俯き加減で話し始める。「どうして父がいつも私のことを気にかけていると判るんですか、直接聞いたわけじゃないんでしょう？」

「マスターにあなたが赤ん坊のときの写真を見せてもらいました。カラー写真が見事に色あせてセピア色に変色していました。なぜか？ずっと日光と外気に触れる場所にあったからです。マスターは窓際に飾ってある、と言ってましたから写真立てに入れていたんでしょう。写真の色あせ具合から見てずっとどこかにしまっていた、あるいは写真立てを伏せていた可能性はありません。ということはマスターは毎日その写真を見ていたことになる。仮にその写真が気に入らなければしまえばいいだけの話です、それに関して干渉する人は誰もいないわけですから。そうしなかったのは、あなたのことを気にかけていた、という以外考えられないというわけです。」

美雪は真剣な表情で耳を傾けている。

「なるほど、合理的な説明です。探偵を生業としているということのも本当のようですね。そうですか、父が。」

沈黙が続く。風で揺れる木戸の音だけが部屋に響き渡っていた。

日が暮れて随分時間も経つ。あまり長居するわけにもいかないの
で、なんとか話を続けようとする、

「すみません、少しの間席を外させて下さい。芝井さんはお食事を
召し上がっていて下さい。」

と言つて部屋を出て行った。機先を制された形となつてしまった
ので、仕方なく食事を再開し美雪が戻つてくるのを待った。一人で
食事するのは慣れているが、こういう典型的な日本家屋の部屋で独
りで黙々と食事するのはなぜか寂しい気持ちがする。あの子はどの
ような気持ちでここに暮らしているのだろう。

しばらくしてから美雪が戻つて来た。もう時間も遅い、やむを得
ないが今日は一旦引き返して後日話の続きをするしかない。美雪に
とっても時間を与えた方が気持ちの整理が付き易いかもしれないの

で、むしろそちらの方が良いようにさえ思えた。

「ごちそう様でした。見知らぬ男が無遠慮に押しかけた挙句、食事まで頂き有難うございました。今日は夜も遅いので帰らせて頂きますが、また後日伺わせて頂きますのでご都合のいい日に連絡下さいますか？」

礼を言った後に名刺を差し出した。美雪は名刺をポケットに収めてから白い封筒を取り出して机の上に置いた。

「それには及びません。これを父に渡して下さいますか？」

席を外している間、父宛ての手紙を書いていたのか。美雪も俺と同じように今日一日で解決できる問題ではないと判断していたのだろう。

「わかりました、預からせて頂きます。本当に今日は色々と有難うございました、これで失礼します。」

封筒を受け取り、スツと立ち上がって玄関へ向かった。

「重ね重ね申し訳ありません。」

駅まで送ってくれた美雪に頭を下げた。美雪は運転席から「いえいえ」と言って元来た道を引き返していった。

失礼します、と言って玄関の戸を開いた瞬間絶望感が広がった、『一人で帰ることが出来ない』と。外は闇夜に支配されていて外灯の明かりすら見つけることが出来なかった。思考回路が停止して佇んでいた俺に、そのことを見透かしていた美雪が車のヘッドライトを照らして乗車するよう合図してくれた。せめて去り際は格好良く、この俺の思いは粉々に砕け散り、苦笑いしながらその厚意に甘えるしかなかった。

疲労からか、新幹線に乗った途端睡魔に襲われ、降りる駅の直前まで眠っていた。新幹線から見える夜景を楽しむことは出来なかったが、美雪とマスターと俺とであの家の食卓で楽しく話しながら食

事をする夢を見て、楽しい時間を過ごすことは出来た。

報告

太陽が沈んで街の明かりが灯り始めた頃、昨日預かった手紙を渡すために喫茶店“ふみ”へ足を運んだ。暮れた時間帯を選んだのはモーニングやランチタイムの混雑を考慮してのものだ、マスターにはある程度時間を取ってもらわないとこちらとしてもうまく伝えられない虞がある。その点夜は普段通りならそれ程客数は多くないのでゆっくり話しをすることができる。

カランカラン、とドアに取り付けてある鈴の乾いた音色を響かせながら中へ入る。店内を見回すと、幸か不幸か客は俺一人の状況だった。マスターと話し易いカウンターの席へ腰を下ろすと同時に、厨房からマスターが顔を出してきた。

「いらつしやいませ。いつものコーヒーでございますね？」

人懐っこい笑顔とともに尋ねてくる。笑った顔がそっくりだ。無意識のうちに昨日の美雪の顔とマスターの顔とを照らし合わせていた。

「ええ、お願いします。」

俺も笑顔で応対する。

もう覚悟を決めて話すしかない。今回の事に関しては俺が勝手に判断して調査したことだ。もしかしたらマスターの意思や希望に反したことをしてしまったのかもしれない。恩を返したい、という自分勝手な理由で出過ぎた事しているのかもしれない。しかし、それでも自分は『マスターに喜んでもらいたい』という一心で調査したつもりだ。引き返すつもりなど毛頭ない。

「お待たせ致しました。」

マスターがコーヒーを差し出す。俺はそれを、この店での最後の一口になるかもしれない、と半ば本気で思いながらゆっくりと口の中へ含んだ。

「昨日マスターの娘さん、白石美雪さんに会って話しを聞くことが

出来ました。」

運命の口火を切った。マスターが驚いたような顔をすることを予想していたが、以外にもうつすらと笑みを浮かべながらため息のようにつう、と一息ついた。まるで諦め顔のように。

「そんなことだろうと思っていました。娘の話を聞いているときの芝井さんの顔が、新田さんと事件の話をしているときのそれにそっくりでしたから。」

またもや露見していたとは、この父娘の観察力には恐れ入る。それとも俺の探偵としての資質に問題があるのか？どうか前者であつて欲しいと願うのみだ。

「娘さんから手紙を預かってきました。詳しい経緯などはマスターが手紙をお読みになってから話すことにします。」

スーツの内側のポケットから白い封筒を取り出し、マスターの前に差し出した。マスターはゆっくりと手を差し伸べ、封を切り手紙を広げた。

手紙

父 様へ

どこから始めていいのかわからないけど、とりあえず『お久しぶりです』。と言っても父

の顔を全く知らないんだけどね。

今、芝井さんという方が家に来ています、父ならこの方のことは良くご存知ですよ。芝井さんは自分の意思で私のことを探していると言っていましたから、父はこの手紙を渡された際にはさぞかし驚いていることでしょう。

まず、母の話をします。

母はもう10年以上前に亡くなりました。詳しい経緯は省きますが、私はそこから母の実家の祖父母に養われて暮らしました。祖母は暖かく迎えてくれて、何の不満もなく成長させて下さいました。今は、足腰の弱った祖父母を私が助けて暮らしていますが、それに関しても何の不満ありません。むしろ、祖父母の笑顔が私の生活の糧になっているぐらいで有難く思っています。

母は父のことを語りませんでした。が病床で、夢を追っている中年男性の奮闘を描いたドキュメンタリーのテレビを見ていた時『男は馬鹿だね』とボソリと呟いたことが妙に耳に残っています。それが父の事を指していたのかどうかはわかりません。が、その表情は馬鹿にしている、憎んでいるといったものではなく何か諦観にも似た顔で微笑んでいたことが印象深く、今でもその場面が脳裏に焼き付いています。

次に私の話をします。私は高校卒業後、地元の会社で働いています。仕事は忙しいけど何とか頑張っています。同僚や先輩にも恵まれ、幸せな日々を送っています。あとは彼氏がいてくれたら最高な

んだけど　なんてね（笑）

父もご存知でしょうが、私も今年で二十歳になりました。色々な社会環境の中で人の気持ちに関しても学んできたつもりです、家族、友人、そして父娘。

それでもまだ、会うにはためらってしまう自分がいます。それは父の事がどうこうではなく、自分自身の気持ちの整理がついていないからだと思います、生きていれば人それぞれ色々な事がありますからね。

けれど今日芝井さんが来て話を聞かせてくれたことは、ひとつのきっかけになりました。顔も温もりも知らない父が未だに私のことを気にかけてくれていること、とても嬉しく思いました。

今は、私の気持ちの整理が出来次第会いに行こうと思いはじめています。その日がいつになるかは私にも判りませんが、その日まで元気でられますよう祈っています。

追伸

芝井さんは父の意思を聞かずに自主的にここへ来たと仰っていました。芝井さんは本当に父の事を想ってこんな片田舎まで来て下さっているのだと思います。たとえこの手紙が、又は芝井さんが私に会いに来たことが父の意にそぐわないものであったとしても、決して芝井さんに対して辛くあたらないようお願いします。

白石　美雪

エピソード

マスターは読み終わるとそつと手紙を閉じ、ふうつ、と息を吐いた。今マスターの脳裏にはあのセピア色の写真が、一瞬にして色彩鮮やかに蘇っていることだろう。20年の歳月を経た想いと色を添えて。

「まず、出過ぎたまねをしたことに対して謝罪します。もしマスターがお怒りになるのであれば、私はこの件に関して詳細を話した後、今日限りでこの店の出入りを差し控えさせて頂きます。」

マスターの余韻の邪魔にならないよう静かな口調で話し始める。

「私は手紙を読んでいませんので重複する箇所があるかもしれませんが、その点はご了承下さい。白石美雪さんは14、5年前から母親の実家で祖父母とともに暮らしています。母親、つまりマスターから見れば前妻に当たる白石恵さんは、かなり前に病気でお亡くなりになっています。その後祖父母の世話をしながら現在に至っているようです。これが離婚後の白石美雪さんの概要です。」

マスターは穏やかな表情で話を聞いている。その表情からはどのような感情で抱いているのかは判断しづらい。

「娘の表情は、娘は元気でしたか？」

若干震えたような声だったが、落ち着いた表情で言う。

「はい。見る限り健康面での不安はないように思えますし、何より明るく頭脳明晰な女性でした。不覚にも私の計画も見破られた挙句、ご相伴にも預かってしまいました。美雪さんの手料理とのことでしたが、これがまたすごく美味い。一度しか会っていないのに感想を述べるのは早計な感じはしますが、白石美雪さんは凛としていて聡明で良識も備えた、それはそれは素晴らしい女性でした。」

マスターはうんうん、と何度も頷きながら聞いていた。

「そうですか。」

マスターが、この話をしてから初めて笑った。それは俺のこと

を許してくれた瞬間でもあったので、俺も自然と笑みがこぼれる。

「芝井さん、この件に関しましては本当に有難うございます。娘も芝井さんが来てくれたことを喜んでいるみたいです。」

「そう言っただいて、今までの苦労なんて全て吹き飛びました。今回に関しては私が勝手に動いた事でもありますし、色んな覚悟を決めてここに来ましたから。」

安堵の表情を浮かべながらマスターに話しかける。

マスターはしばらく俯いていたが、急に思い出したかのように

「あつ、コーヒーが冷めてしまいましたね。今代わりを淹れてきます。」

と言っで、奥の部屋に入ってしまった。

それからしばらく経ってもマスターは現れなかった。俺はその間もずっと黙って目を瞑り戻って来るのを待った。

マスターはきつと、泣いているのだろう。

——了——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5164p/>

セピア色の記憶

2010年12月25日18時10分発行